

＜太田 昇 真庭市長を表敬訪問＞



左から、木村幹雄、太田 昇市長、只友景士、楳田博之、田中宏樹

真庭市のバイオマス関係の視察を終えた後、真庭市役所の太田 昇市長を表敬訪問しました。

太田市長は、1975年から2013年まで京都府に勤務され、2013年に出身の真庭市長にと乞われて府庁を退職されるまで、総務部地方課参事、財政課長や総務部長、2010年には山田知事の下で副知事も務められました。その間、京都府の窓口として自治労との関係も深く、立場は違っても知事の片腕として、さまざまな場面でいろいろとご教示いただき、大変お世話になった方です。

訪れた真庭市は、2013年に発行された『里山資本主義』（藻谷浩介著）でも取り上げられ、循環型持続社会をめざす取り組みの、先端を行く自治体です。市役所に着いてまず目を引くのは、庁舎前に設置された地域資源を活用した、大きな木造の「回廊」です。

太田市長は、終業時間近くにもかかわらず、われわれの訪問を快く受け入れていただきました。

市長からは、まず『里山資本主義』を体現する真庭市の挑戦について、熱く語っていただきました。とくにバイオマス発電事業では、無借金経営が続けられていることや、バイオマス発電などの「大きな里山資本主義」と、各地域の特色ある資源を活かした「小さな里山資本主義」が相互に連携し合いながら前進していくということを市政の方向としていること。また、それに基づき、市役所本庁舎では、





バイオマス発電の電気とバイオマスボイラーの熱、それに敷地内での太陽光発電により、地域由来の再生可能エネルギーを100%使用していることなど、現在の取り組みを聞かせていただきました。

とりわけCLT（集成材）活用が、今後の循環型社会を築く重要なポイントでもあるとの認識から、47都道府県で産した木材を大量に使用した国立競技場を設計した「隈研吾」さんが監修し、2019年、東京晴海に誕生した「CLTパビリオン」を真庭市の国立蒜山公園に移築、今後は蒜山の観光や文化の発信拠点に生まれ変わるとのことです。

また、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が出される前の訪問でしたが、真庭市では、岡山県内でいち早く「対策会議」を開催し、大きく報道されました。その早い対応は、市長が府庁時代に経験されたSARS（サーズ）騒動の経験があったからとのことでした。

そして、真庭と言えば「湯原温泉郷」が思い浮かびます。「湯原」は、川原に沸く混浴露天風呂の「砂湯」が有名です。女性も気軽に入浴できるようにと、ワコールとの共同開発で、女性専用湯浴着が開発され、「はんざきちん湯浴み着」として人気だそうで、その開発にも、市長は少しかわっておられたとか。

このように、「里山資本主義」の実践に、真庭市の先頭に立って取り組んでおられる太田市長のお話をお伺いし、京都におられた時と変わらない、行政にかける熱意と貴重なお話を聞かせていただきました。

太田市長のこれからも変わらないご活躍をお祈りいたします。

（文責 木村幹雄）